

国際バカロレア・ディプロマプログラム Theory of Knowledge (TOK) について

平成24年8月

国際バカロレア・ディプロマプログラムにおける
「TOK」に関する調査研究協力者会議

目 次

1	なぜ今国際バカロレアなのか	1
2	国際バカロレアの趣旨・概要	4
	(1)国際バカロレアとは	4
	(2)ディプロマプログラム (DP) の概要	4
	(3)DP のカリキュラムの概要	5
	(4)IB 教育と我が国の教育	7
3	TOK の趣旨・目的	9
	(1) TOK とは何か	9
	(2) TOK と各グループの学習との関係について	1 3
4	TOK の指導・評価体系	1 4
	(1) TOK における指導・評価の流れ	1 4
	(2) TOK の評価	1 4
	(3) 課題エッセイ	1 5
	(4) プレゼンテーション	1 7
5	TOK における具体的な評価規準	2 2
	(1) 課題エッセイ	2 2
	(2) プレゼンテーション	2 6
	[参 考]	
	国際バカロレアの認定校になるまでの手続き	3 0
6	IB 認定校における TOK の具体的な単元の指導事例	
	(1)加藤学園暁秀高等学校	3 1
	(2)玉川学園高等部	6 9
	(3)立命館宇治高等学校	9 3
	[資 料 編]	1 1 3

1 なぜ今国際バカロレアなのか

知識基盤社会の到来やグローバル化の進展により、アイデアなど知識そのものや人材をめぐる国際競争が加速するとともに、異なる文化との共存や国際協力の必要性が増大しています。

このような社会を生きていく子どもたちには、自ら課題を発見し解決する力、コミュニケーション能力、物事を多様な観点から考察する力（クリティカル・シンキング）、様々な情報を取捨選択できる力などが求められます。

2010年度の全国学力・学習状況調査の結果によると、我が国の子どもたちの学力は、基礎的・基本的な知識・技能に一部課題があるとともに、知識・技能を実生活の場面に活用する力や読解力等にも課題があることが明らかになりました。国際的な学力調査においては改善傾向にありますが、特に読解力について、必要な情報を見つけ出し取り出すことは得意であるものの、それらの関係性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結び付けたりすることがやや苦手であるという結果が出ています。また、学習習慣、学ぶ意欲等についても、国際的に見て相対的に低い状況となっています。

文部科学省では、2008年3月に幼稚園、小学校及び中学校、2009年3月に高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等を改訂し、新しい学習指導要領は、小・中学校では既に全面実施され、高等学校においても2013年度の入学生から年次進行で実施されます。子どもたちが、変化の激しいこれからの社会を生きていくために、新しい学習指導要領では、知・徳・体のバランスのとれた力である「生きる力」を育むという基本理念の下、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等をバランスよく伸ばしていくこととしています。このため、授業時数を増加するとともに、社会の変化に伴い子どもたちに指導することが必要な知識・技能の確実な習得や、つまずきやすい内容の確実な習得を図るための繰り返し学習の充実、観察・実験やレポートの作成など知識・技能を活用する学習活動の充実、教科等を横断した課題解決的な学習や探究的な活動の充実を図り、教育内容を充実させています。

一方で、我が国の若者のグローバル化に対する意識は、近年変容を見せています。例えば、日本人の海外留学者数は2004年をピークに減少が続いており、また、海外での勤務を希望しない新入社員が増加していると言われるなど、若者の「内向き志向」が懸念されているところです。

このような中、2011年5月には、我が国の成長の牽引力となるべき「グローバル人材」の育成と、そのような人材が社会で十分に活用される仕組みの構築を目指して「グローバル人材育成推進会議」が設置されました。2012年6月に取りまとめられた「グローバル人材育成戦略」においては、我が国がこれからのグローバル化した世界の経済・社会の中にあって育成・活用していくべき「グローバル人材」に必要な要素として、以下のような整理がなされています。

- 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力
- 要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
- 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

このほか、「グローバル人材」に限らずこれからの社会の中核を支える人材に共通して求められる資質として、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと（異質な者の集団をまとめる）リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等が挙げられています。また、グローバル人材の育成に向け、初等中等教育の諸課題として、小中高を通じた英語・コミュニケーション能力等の育成や高校留学の促進等とともに、国際バカロレア（以下「IB」という。）資格への対応が挙げられ、「高校卒業時に国際バカロレア資格を取得可能な、又はそれに準じた教育を行う学校を5年以内に200校程度へ増加させる。」といった目標が掲げられています。

IBの教育理念は全人教育にあり、そのカリキュラムは、学習指導要領が目指す「生きる力」の育成や、課題発見・解決能力、論理的思考力やコミュニケーション能力等重要能力・スキルの確実な習得に資するものであると考えられます。しかし、我が国におけるIB資格の認知度はまだまだ低く、特にディプロマプログラム（以下「DP」という。）については英語等で授業を実施することが求められるため、各学校にとってはハードルの高いものとなっている現状です。

このため、文部科学省では、平成24年度予算に、「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進」に係る費用を計上し、IBの趣旨を踏まえたカリキュラムや指導方法、評価方法等に関する調査研究を行うこととしています。日本語で授業を実施することも含め、IBの理念を生かしたカリキュラムづくりを行う学校を指定し、IBの趣旨を踏まえたカリキュラムや指導方法、評価方法等に関する新たなモデルを構築することにより、我が国の教育の改善に資するとともに、IBの認知度の向上や裾野の拡大を行い、グローバル人材の育成や将来的なIB認定校の増加につなげることを目指します。

IB教育は、我が国の子どもたちがより一層「生きる力」を身に付け、今後、グローバル化社会の中で活躍していくため、初等中等教育段階における諸課題に対して解決策の1つを提供しうる可能性を持つものであり、IBへの関心が高まってきているところです。

本資料は、「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進」のために指定された学校をはじめ、各学校等においてカリキュラムや指導方法、評価方法の検討を行う際の参考になるよう、DPの中核であるTOK（Theory of knowledge）を中心にその趣旨・目的や指導・評価方法等をまとめるとともに、IB認定校における指導事例を掲載したものです。本資料により、DPやTOKのすべてを理解できるというものではありませんが、学校や学校関係者がDPやTOKを知るきっかけになることを期待しています。

<参考：IBの学習者像>

Inquirers	探究する人
Knowledgeable	知識のある人
Thinkers	考える人
Communicators	コミュニケーションができる人
Principled	信念のある人
Open-minded	心を開く人
Caring	思いやりのある人
Risk-takers	挑戦する人
Balanced	バランスのとれた人
Reflective	振り返りができる人

なお、本資料では、IBO の資料等を参考に、文部科学省で仮の日本語訳を当てており、一部の用語については、以下のとおり、本資料における訳を統一しています。

語句	日本語訳
Theory of Knowledge (TOK)	TOK (日本語訳せず)
knowledge issue	knowledge issue (日本語訳せず)
knowledge claims	knowledge claims (日本語訳せず)
knower	学習者
Areas of knowledge	知識の領域
Ways of knowing	知るための方法
reason	根拠 又は 理性
perception	知覚

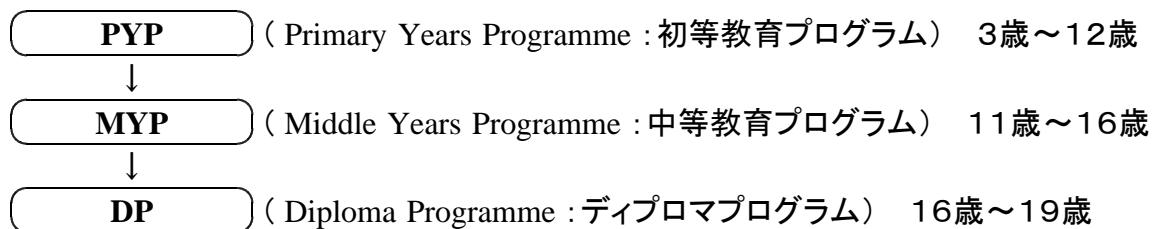
2 国際バカロレアの趣旨・概要

(1) 国際バカロレアとは

国際バカロレア機構（以下「IBO」という。）は、インターナショナルスクールの卒業生に、国際的に認められる大学入学資格を与え、大学進学へのルートを確保するとともに、学生の柔軟な知性の育成と国際理解教育の推進に資することを目的として、1968年に発足した非営利の教育機関です。ユネスコや多くの国々の政府機関、財団基金の協力を得て活動を行っています。

IBOは、スイスのジュネーブに本部を置き、認定校に対する共通カリキュラムの作成や国際バカロレア試験の実施及び国際バカロレア資格の授与などを行っています。

IBには、3歳から19歳の子どもの年齢に応じて3つのプログラムがあります。



DPの課程を修了し、DP資格取得のための統一試験に合格することで、IB資格を取得することができます。IB資格は国際的に認められている大学入学資格の1つであり、我が国においても昭和54年に「スイス民法典に基づく財団法人である国際バカロレア事務局が授与する国際バカロレア資格を有する者で18歳に達した者」について、大学入学に関し高等学校を卒業したものと同等以上の学力があると認められる者として指定されました。2012年7月現在、IBに認定されている学校数は、世界141か国において約3,400校に上ります。日本において、IB・DPの認定校数は16校、うち学校教育法第1条に規定されている学校は、加藤学園暁秀高等学校、玉川学園高等部、AICJ高等学校、立命館宇治高等学校、ぐんま国際アカデミー高等部の5校となっています。

(2) IBの3つのプログラムの概要

① PYP

3歳から12歳を対象としており、精神と身体の両方を発達させることを重視しているプログラムです。カリキュラムは「何を学びたいか」「どうしたら一番よく学べるか」「どうしたら何を学んだか分かるのか」という3つの質問を中心に構成され、どのような言語でも提供可能となっています。PYPのカリキュラムの基礎には、「私達は何者なのか」「私達はどのような時代、場所に生きているのか」「私達はどのようにして自分を表現するか」「世界はどう動いているか」「私達は自分たちをどう組織しているか」「地球の共有」といった6つの学際的なテーマがあります。これらのテーマに取り組むべく、PYPのカリキュラムには、「概念・知識・技術・態度・行動」の5つの基本要素が組み込まれている6つの教科（言語、社会科学、数学、芸術、科学、体育と個人教育）を実施することとなっています。

② MYP

MYPは11歳～16歳までを対象としており、青少年に、これまでの学習と社会のつながりを学ばせるプログラムです。MYPのカリキュラムは、「学習の姿勢」「共同体

と奉仕」「人間の創造性」「多様な環境」「健康と社会教育」といった5つの交互領域を各教科（第一言語、第二言語、人文、科学、数学、芸術、体育、技術）に取り入れます。また、最終学年に個人プロジェクトに取り組むこととなっています。

MYP はどのような言語でも提供可能です。また、学習期間は5年と設定されていますが、もっと短い期間での学習も可能となっています。

③ DP

DP は、16歳から19歳までを対象としており、合格すると世界各国で認められている大学入学資格を得られる最終試験があるプログラムです。DP では、総合的でバランスのとれたカリキュラムを提供し、高度な試験と評価を実施することによって、認定校の生徒が高度な知的水準や学術水準に挑戦すると同時に、責任ある地域社会の一員となって国際理解を深める総合教育を行っています。（詳細は（3）参照）

(3) DP のカリキュラムの概要

① 各グループについて

DP のカリキュラムは、下表の6つのグループにより構成されます。DP 資格を取得するためには、グループ1からグループ5までの中からそれぞれ1科目ずつ選択し、さらにグループ6から、芸術又はグループ1からグループ5の中からもう1科目選んで、合計6科目を2年間履修します。3～4科目は上級レベルで、その他の2～3科目は標準レベルでの履修となり、上級レベルでは240時間、標準レベルで150時間の履修が必要となります。

		科 目
グループ1	第一言語	母語又はそれに準じる言語の文学学習
グループ2	第二言語	第一言語に準じる高度なバイリンガル言語能力、既習外国語（中～上級）、未習外国語（初級）の3レベルのほか、ラテン語、古典ギリシャ語の選択も可
グループ3	個人と社会	歴史、地理、経済学、哲学、心理学、文化及び社会人類学、ビジネスと経営学、イスラム世界の歴史、グローバル社会における情報技術
グループ4	実験科学	生物、化学、物理、環境システム、デザイン技術
グループ5	数学とコンピュータ科学	数学、高等数学、数学的方法、数学的研究、コンピュータ科学（数学を履修した上、グループ6として選択可能）
グループ6	芸術又は選択科目	美術・デザイン、音楽、演劇、又は上記の科目からもう1科目を選択

② その他の資格取得要件について

各グループの科目の履修に加え、DP 取得のためには、以下の3つの要件を満たす必要があります。

ア Extended Essay（EE：課題論文）

生徒が学んでいる科目に関連した研究課題を決めて、自分で調査・研究を行い、4,000ワード以内で学術論文にまとめます。

イ Theory of Knowledge (TOK)

学際的な観点から個々の学問分野の知識体系を吟味して、理性的な考え方や客観的精神を養います。さらに、言語・文化・伝統の多様性を認識し国際理解を深めて、偏見や偏狭な考え方を正し、論理的思考力を育成します（詳細は3参照）。

ウ Creativity / Action / Service (CAS：創造性・活動・奉仕)

教室を出て広い社会で経験を積み、いろいろな人と共同作業することにより、協調性、思いやり、実践の大切さを学びます。2年間にわたり、創造性、活動、奉仕のそれぞれについて50時間ずつ（合計150時間）実施することが必要です。

DPは、授業、試験ともに英語、フランス語、スペイン語のいずれかで行われるのが基本です（一部、試験的に中国語とドイツ語でも行われています）。

③ DPの評価

生徒はプログラムの終わりに筆記試験を受けます。筆記試験の評価は、IBOが選任する国際的権威を持つ主任試験官が監督し、世界各地にいる試験官を統括して行います。IBOでは、各教科等の性質に応じた評価規準を作成しており、試験官は、それに基づいた評価を行うよう訓練されています。また、各学校の教員は、IBO主催の研修会において、評価方法や評価規準等について学んでおり、生徒の学習活動について学内評価を行います。IBOの試験官は、各教員による学内評価を査定し、必要に応じて評価を修正した上で最終評価を決定します。

具体的には、国際バカロレアの評価は7段階となっています。合格するには、6つのグループで合計24点以上（各グループで4点以上）を取得するとともに、3要件（EE、TOK、CAS）を満たすことが必要であり、EEとTOKの両方の成績が3点まで加算されます（満点は7点×6グループ＋EE及びTOK 3点で45点）。

(4) IB 教育と我が国の教育

① IB 教育の特徴

ア IBO が掲げる理念

IBO の教育理念は全人教育にあります。DP では、総合的でバランスのとれたカリキュラムを提供し、独自の評価システムを実施することによって、生徒に学術性の高い課題へ挑戦することを促すとともに、地域での奉仕活動や様々な自主的活動により責任感や社会性を育む教育を行っています。プログラム全体を通じ、生徒に論理的思考力や表現力、さらには探究心や学術的思考、異文化に対する理解と寛容性などを育むことを重視しています。

イ 総合的でバランスのとれたカリキュラムと学習方法

DP のカリキュラムにおいて、生徒は、6つのグループで構成される学習と、EE（課題論文）、TOK、CAS（創造性・活動・奉仕）の3つを履修することとなっています。どのグループにおいても、学習したことを実社会での出来事や問題と関連付け、実際に活用できるよう配慮した学習活動を行うことが重視されます。

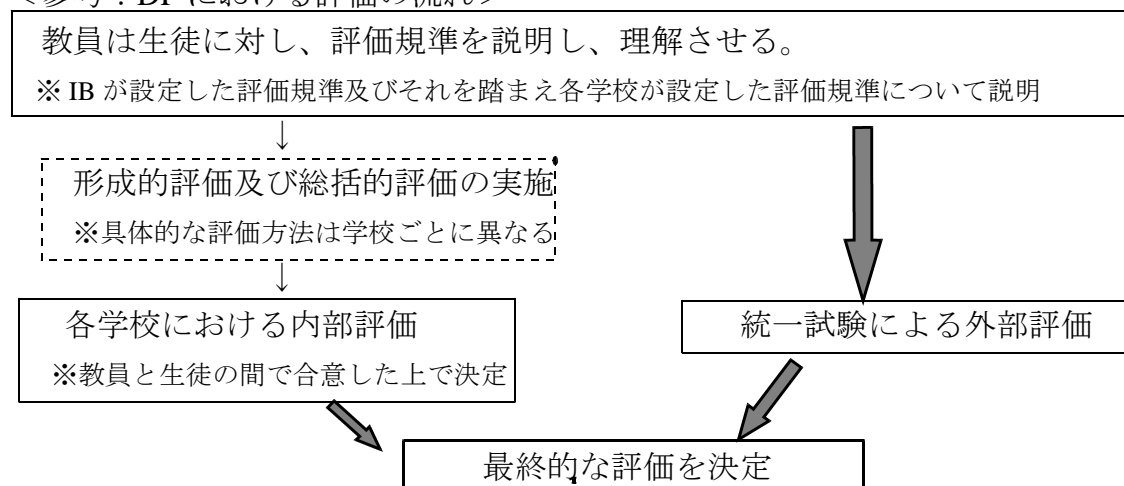
また、DP の中心はあくまで学習者である生徒であり、教員はそれをサポートする役割として位置付けられ、以下のような学習方法を取り入れながら、生徒の経験や既存概念に基づく学習活動を中心にして授業が組み立てられます。

- i) 探究型学習：質問を提示し、批判的思考や課題解決に取り組む
- ii) プロジェクト型学習：グループや個人で課題を設定し、研究に取り組む
- iii) 協同型学習：学問上の目的達成に向けグループワークやペアワークに取り組む

ウ 独自の評価システム

DP における生徒の評価は、IBO に選任された試験官と、研修会等を通じて訓練された各学校の教員によって行われます。筆記試験の結果だけでなく、授業中の活動、宿題、ノートなど、通常の学習活動に対する学内評価も加味して最終的な評価を行うことにより、試験というプレッシャーの中だけではなく、通常の授業においても、生徒の学習成果を評価しようとしています。各学校においても、IBO が作成する評価規準を踏まえつつ、具体的な学習目標や評価規準を定め、それに基づいて評価を行います。これらの学習目標や評価規準は、事前に生徒にも提示されます。

<参考：DP における評価の流れ>



② 我が国の教育との関係

変化の激しいこれからの時代を生き抜くために、我が国の学習指導要領では、知・徳・体のバランスのとれた力である「生きる力」の育成を理念とし、基礎的・基本的な知識・技能の習得と、知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力の育成を重視しています。この理念は、IBO が掲げる理念と方向性を同じくする面があり、IB 教育は、我が国が掲げる理念の実現に資する一つの方法となる可能性を持つと考えられます。

IB 教育においては、知識・技能の活用という点に実践的に取り組んでおり、上述のとおり、理念の実現に向け、学習方法や評価方法を徹底することで、生徒はレポートやエッセイなどの提出物、社会奉仕活動など、課題遂行のために相当の勉強や実践を行うことが求められます。課題発見・解決能力、論理的思考力、コミュニケーション能力をはじめ、文章執筆能力、プレゼンテーション能力などが培われ、物事を多様な観点から考察する訓練になるといった点において、優れたカリキュラムと言えるでしょう。

3 TOKの趣旨・目的

(1) TOKとは何か

① TOKとは

TOKは学際的な観点から個々の学問分野の知識体系を吟味して、理性的な考え方や客観的精神を養うものです。さらに、言語・文化・伝統の多様性を認識し国際理解を深めて、偏見や偏狭な考え方を正し、論理的思考力を育成します。

私たちを取り巻く世界は、近年、情報化やグローバル化の進展など、変化の激しい世界となっており、このような変化が周囲へ与えるインパクトやその範囲は、地域によって様々な違いはあるものの、知識の形成に深い影響を与えるものであると言えるでしょう。

近年、知識の急激な増大が起こっていますが、それは単なる知識量の増大ではなく、知識の専門化・細分化が進んでいます。同時に、量子力学やカオス理論といった20世紀の発見によって、認知や予測が不可能な物事が存在するという事実も明らかになってきました。

DPの中核となっているTOKの学習では、生徒たちが、様々な場面に直面した際に状況理解の指針となる考え方として、物事を多様な観点から考察する力（クリティカル・シンキング）を重視しています。

TOKの授業を受けているとき、生徒は、次のような視点を重視します。

- 知識とはどのようなものか
- 知識を増やす方法とは
- 知識の限界とは
- 知識は誰のものなのか
- 知識の価値とは
- 知識を“持つ”又は“持たない”とはどのような意味なのか

TOKの学習の中心には、常に「学習者」としての生徒が存在します。長期間の学校内外での生活を経て、生徒は膨大な量の知識を獲得し、考え方を学び、意見を持つ経験を積み重ねてきています。TOKでは、新しいことを学ぶという側面から少し離れて、既に持っている知識に関するKnowledge Issue（詳細はi参照）について深く考える学習を進めていきます。Knowledge Issueとは、生徒の視点から生じる疑問を含むものであり、以下のような基本的な疑問からはじまります。

- 知るためには何が必要か
- それは正しいことなのだろうか

このような疑問は、非常に抽象的であり、また哲学的な要素を含む難解なものではありますが、TOKを担当する教員は、生徒の興味を引き出し、核となる部分に近づいていけるような授業計画を立て、学習環境を整え、指導を進めていくことが必要です。

Knowledge Issueに関する生徒の新しい発見やアイデアを発表する場として、ディスカッションを行います。TOKでは、他の生徒の考えに積極的に耳を傾けることや、お互い

の意見を共有することを重視しています。このような経験を重ねていくことで、様々な考え方や知識に対する理解を深め、より豊かな知性を形成していくことが期待されます。

② TOK ダイアグラム

TOK では、生徒の思考、疑問などが学習の中心にあると考えられていることから、図の中心には個人または集団としての「学習者 (Knower(s))」が描かれています。

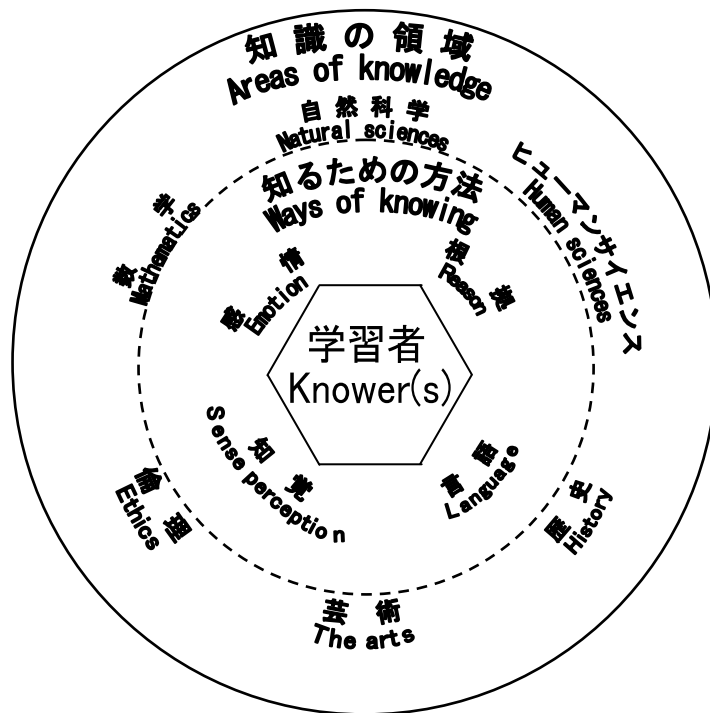
「学習者」を取り囲むように、4通りの「知るための方法 (Ways of knowing)」として、感情的・精神的影響を表す「感情 (Emotion)」、感覚として受ける刺激を表す「知覚 (Sense perception)」、言語によって形成され表現されたものを表す「言語 (Language)」、明確な理由を持って物事を明らかにする試みを表す「根拠 (Reason)」が記されています。これらの方法を通して、広い世界への探究と様々な情報の獲得が行われます。

TOK における「知識の領域 (Areas of knowledge)」とは、数学、自然科学、ヒューマンサイエンス、歴史、芸術、倫理のことを指しています。知識は、「知るための方法 (Ways of knowing)」に関連した「どのようにして知るのか」という疑問と、「知識の領域 (Areas of knowledge)」に関連した「何を知るのか」という疑問が、相互に作用し合いながら獲得していくものであるため、実際には図に描かれているような、「知識の領域 (Areas of knowledge)」と「知るための方法 (Ways of knowing)」を隔てる壁は存在しないものと考えられます。

<TOK におけるキーワード>

i) Knowledge Issue

知識を獲得する、追究する、生み出す、形作る、受け入れるなど、知識との様々な関わりを通じ、自分自身や周囲の人々、さらに、それを取り巻く世界を理解していく上で生じる様々な疑問を Knowledge Issue と呼びます。TOK において Issue は、「問題」という面だけではなく、何かを学び取るための探究へ導くものとして扱われます。Knowledge Issue は、「知識の領域 (Areas of knowledge)」において、偏ったアプローチや知識の限界等によって生じる不確実な状況や、異なる様々な分野において知識が適切で正しいものかどうかを証明するための解決策を見出す糸口となるものです。そして同時に、知識がどのように役に立ち、何を授け、喜びを与えるものかということも明らかにするとともに、生徒の考え方や行動の基盤ともなるものです。



TOKダイアグラム

二つの例を挙げます。

- 「知っていること」と「知らないこと」の違いは何か

知識に焦点を当てて考えた場合、単にそれを知っているかどうかということに重点が置かれます。一方で、**Knowledge Issue** の観点では、その知識が本当に正しいものかどうか、役立つものかどうかという部分がより重要視されます。

- 知識を得るために最も良いと思われる「知るための方法」とは

知識に焦点を当てて考えた場合、ある特定の「知るための方法」を過信したり、過度に依存しすぎたりすることは賢明ではないということに重点が置かれます。一方で、**Knowledge Issue** の観点から見ると、その方法に依存するのはなぜか、その方法を過信する理由は何か、ということについても深い関心が注がれます。

ディスカッションや探究など、**TOK** の観点からアプローチを行うことは全て **Knowledge Issue** と考えることができます。疑問も、**TOK** のねらいと学習目標を念頭において、**TOK** の観点から見ていくことで **Knowledge Issue** となり得ます。しかし、同じ疑問でも、別の視点から見ると、答えは単純なものであり、**TOK** の観点を必要としない、取るに足らない疑問となることもあります。

ii) 知るための方法(Ways of knowing)

TOK においては、ダイアグラムにあるとおり、知識を獲得するための方法として、知覚、感情、言語、根拠という4つの主な方法があるとされています。注意深く考える「学習者」を育てるためには、このような4つの「知るための方法(Ways of knowing)」を通じて知識を獲得するプロセスを続けていくことが必要です。「知覚」は、知覚器官を通して、あるがままの世界を見ることを提供し、「感情」は、振り返る間もなく、私たちを支配します。思考形成における「言語」の影響は明らかになっていませんが、「言語」の獲得は、我々にとっては容易なことであり、言語によって、他者とのコミュニケーションも決して難しいものではなくなります。「根拠」の示し方や論法を知っていれば、それを本格的に学ばなくても、言葉で議論することができます。

TOK では、4つの「知るための方法(Ways of knowing)」が設定されていますが、4つの「知るための方法(Ways of knowing)」のうちのいくつかを使えば、多くの事柄を理解できるというものではありません。他にも、「知るための方法(Ways of knowing)」があるかもしれませんし、それぞれの方法がどのように関連しているのかを探究することは有益です。

iii) 知識の領域(Areas of knowledge)

TOK ダイアグラムの枠内に書かれている「知識の領域(Areas of knowledge)」は、数学、自然科学、ヒューマンサイエンス、歴史、芸術、倫理といった、我が国における教科等に当たるような一般的な分類の領域です。この領域においては、知識を教科等に分類する理論的な根拠とともに、各分野間の比較に関する課題を取り扱います。

「学習者」としての生徒自身の経験は、**DP** で取り組むことになるたくさんの課題の基礎となります。教員は、生徒が学ぶときに、新しい概念を示しながら解説を加えることが必要なときもあります。生徒が自らの知識を振り返ることを手助けして、導いていくことが重要です。「知るための方法(Ways of knowing)」では、「私はどのようにして知るのか」という質問がたびた

びされます。この質問は、「知識の領域 (Areas of knowledge)」における、「私は何を知っているのか」、「唱えられた主張が真実であること、あるいは、下された判断が正しい根拠に基づいていることなどを、どのようにして知るのか」といった質問と相互に関係するものです。

iv) Knowledge claim

Knowledge claim とは、実際ある事実に対する主張です。生徒たちは、Knowledge claims の種類を区別することを学びます。例えば、科学や歴史の中の事実に基づく主張、倫理における価値又は宗教的信念に基づく主張などです。生徒たちは、実際に言われていることを、曖昧な点があることや主観的な点があること、実際に言われていることとその意図することに間にある社会的又は文化的な表現の違いなどを認識しながら確かめていきます。また、同時に、生徒は、Knowledge claim に対する自分なりの解釈の仕方の偏りや誤りを認識していきながら、その Knowledge claim を正しく調べていくことが促されます。

③ TOK のねらい

TOK のねらいには、以下のようなものがあります。

- 高度な知識を獲得することへの興味・関心を高め、その欲求を満たすための努力を促す。そのような考え、意識を持つことにより、資質・能力を更に高めていく。
- 個人やコミュニティにおいて、どのように知識が構築され、批判的に検証され、評価され、また、新しい知識と置き換えられていくのかを認識させる。
- 日常の学習生活における「学習者」としての経験を振り返り、異なる学問分野における様々な考え方、感じ方、行動などの関連について考えるよう促す。
- 個人やコミュニティにおける生活様式や考え方の違いに興味を持ち、自分自身の視点での感じ方と他者の視点からの感じ方の違いについて認識するよう促す。
- 世界市民としての個人やコミュニティと知識との関係に付随する責任に関する認識を促す。

④ TOK の学習目標

TOK の学習目標には、以下のようなものがあります。

- 知識が示すもの、その前提にあるもの、背後にある意味などを批判的に分析する。
- 「学習者」としての生徒自身の経験や「知識の領域 (Areas of knowledge)」、「知るための方法 (Ways of knowing)」などの学習に基づいた Knowledge Issue に関連する質問、説明、推測、仮説、仮説への反論、可能性のある解決法を導き出す。
- Knowledge Issue に対する様々な異なる考え方や認識について理解を示す。
- Knowledge Issue への様々なアプローチの仕方について関連付けや比較を行う。
- Knowledge Issue への取組に個人的に自覚を持って対応できる能力を身に付ける。
- 学問的誠実さ、正確さに十分に配慮をしながらアイデアを練り、他者へははっきりと伝える。

(2) TOKと各グループの学習との関係について

TOKの枠の中で、Knowledge Issueについて考えを巡らせることはもちろん重要ですが、TOK以外の各グループの学習においてTOKの考え方を取り入れることで、新しい視点を発見することもできるでしょう。例えば、生物では、目の構造を勉強し、網膜に到達した光が電気信号に変わり、神経を経て脳に伝わり、その信号を脳の視覚野が認識すると学びます。このときに、「見えているものは、目で見ているのではなく、知識で見ている」と考えてみることも有意義なことです。また一方で、TOK担当教員が、TOK以外の他のグループの学習における生徒の経験とKnowledge Issueとを関連付けたディスカッションを授業の中に取り入れていくということも考えられます。

4 TOK の指導・評価体系

(1) TOK における指導・評価の流れ

TOK は、「学習者と知ること (Knowers and knowing)」、「知るための方法 (Ways of knowing)」、「知識の領域 (Areas of knowledge)」で構成され、DP の2年間を通じて100時間の学習が必要となります。

TOK において中核となる問いの1つが、「私たちはどのようにして知るのか」という問いであり、「学習者と知ること (Knowers and knowing)」においては、「知識とは何か」「知識と信念はどのように違うのか」「知識、情報、知恵の違いは何か」といった質問を通じて知識の特徴について考えます。「知るための方法 (Ways of knowing)」は、感情、知覚、言語、根拠といった4つの主な方法で構成され、ここでは、それぞれの方法について考えていくとともに、世界で生じていることを理解しようとするときに、これらの方法にどの程度頼ることができるのかについて考えます。「知識の領域 (Areas of knowledge)」は、数学、自然科学、ヒューマンサイエンス、歴史、芸術、倫理という6つの分野で構成され、それぞれの分野において、「私たちはどのようにして知るのか」、また、4つの「知るための方法 (Ways of knowing)」がそれぞれの分野においてどのような役割を果たしているのかについて考えます。さらに、知識の限界についても考えます。

各学校においては、TOK の考え方を生徒に理解させた上でこれらの内容を扱いますが、それぞれの内容について、どの程度の時間をかけ、どのような教材を使って指導するかは各学校の裁量に委ねられています。生徒たちが以下で述べる DP 試験で課されるエッセイ課題やプレゼンテーションに取り組むことができるよう、IBO の評価規準を踏まえつつ、各学校は、独自の評価規準を設定し、それらの訓練になるような創意工夫を生かした授業を行っています。

(2) TOK の評価

DP 試験における TOK の評価は、以下の2点で行われます。

- 外部評価 (40ポイント) : 課題エッセイ (1, 200から1, 600ワード※)

※英語の単語数 (日本語の文字数ではないので要注意)

IBO が試験期間ごとに定める、10の課題 (資料1-3参照) の中から一つを選び、課題エッセイを執筆します。IBO 試験官が事前に提示されている評価規準に基づき、提出された生徒の課題エッセイを評価します。

- 内部評価 (20ポイント) : プレゼンテーション (10分間)

授業の中で、個人又は小グループでプレゼンテーションを行います。その際、生徒は、プレゼンテーション計画書とプレゼンテーション評価表を作成します。IBO には、教員が記入したプレゼンテーション評価票を提出します。

※DP では、教員は、4つの評価規準を事前に生徒に示し、それに基づく評価を生徒に対して説明し、生徒の主張も踏まえた上で、最終的な評価を決定します。

評価の合計60ポイント満点のうち、生徒が獲得した得点によって、TOKの評価A～Eを付けます。

生徒の学習成果に対する5段階の評価:

A: Excellent B: Good C: Satisfactory D: Mediocre E: Elementary

(3) 課題エッセイ

① 概要

IBOによって指定される10の課題の中から一つを選択し、エッセイを執筆します。完成したエッセイは、外部評価の対象となります。複数の分野にまたがって、知識に関連する包括的な疑問を投げかけるようなテーマを設定します。

課題エッセイについては以下の点に留意することが必要です。

- 学校の内外において見聞きした様々な意見や、DPの学習で学んだことなどを参考としながら自分なりの考えを示す。
- Knowledge Issueについて深く考えを巡らしつつ、生徒が自らの力で導き出した結論を、エッセイの中でしっかりと示す。エッセイを書くに当たり、どのようなアプローチを試みたかを分かりやすく例で示し、賛成意見や反対意見なども理論的に組み入れて、主張を展開していく。
- 「知識」、「知識の領域 (Areas of knowledge)」、「知るための方法 (Ways of knowing)」をどのようにリンクさせるのか、エッセイを通して自分自身の考えを示す。
- 一度選択したテーマは、変更することは認められない。テーマを変更した生徒は、評価ポイントが低くなるか、もしくはポイントがゼロとなることがある。エッセイの核となる Knowledge Issue はテーマに沿って考えられたものであるはずなので、テーマの変更はそもそもありえないことと考えられる。
- 全体的に読みやすく、表現力に優れ、参照や参考文献リストが適切に使われていることが求められる。

② エッセイ全体に関する理解と参照

生徒は、提出したエッセイの全容について十分に把握し、理解してはなりません。エッセイの全容とは、エッセイ本文はもちろん、エッセイ本文で引用した他者の考え方やアイデア、参考として使用した資料など、エッセイの内容の詳細全てが含まれます。また、盗用などの事態を避けるため、自分のエッセイは、データや紙面でのコピーなど、いずれの形式であっても、他生徒に渡さないなど、エッセイの管理についてもしっかりとした認識を持っていることが求められます。

一般的に、誰もが知る事実や世界的に常識とされる事柄については、参照に記す必要はありません(例: 1945年に終戦を迎えた第二次世界大戦)。しかしながら、ある特定の文化においては常識だと考えられるものでも、他の場所ではほとんど知られていないということもあり、そのような可能性のある事柄については、信頼性の高い資料を参照として添付する必要があります。深く考えて書かれたものでも、調べものが十分に行われていなければ信頼性が低いとみなされます。

資料の出典を明確にし、必要な時にすぐ探し出せる状態にしておくことが TOK にお

ける参照の主な目的です。また、授業のノートやディスカッションの際の発言など実際の出来事の引用が必要な場合は、ディスカッションが行われた日付や発言者の氏名など、出典情報をできるだけ細かく示し、引用に関する正式な手順を踏み、事実関係を確認できる適切な資料を用意するなどの対応が求められます。

③ 参考文献リスト

特定の資料を使用した場合には、参考文献リストにその出典を記載しなくてはなりません。参考文献リストの作成は、本、ジャーナル、雑誌、オンラインリソースを生徒が使用した場合に限られます。

参考文献リストには以下のような項目が記されます：

- 著者・題名・出版の日付と場所
- 出版社名と出版社のホームページ URL (http://....) など

④ エッセイの長さ

所定のテーマによるエッセイの長さは1,200 から1,600ワードです。単語数としてカウントされるのは、エッセイ本文と引用部分です。謝辞、参照（脚注で記されているものも含める）、地図、チャート、表、注釈付きの図や絵、グラフ、参考文献リストは、単語数としてカウントされません。

⑤ 教員の役割

所定課題のエッセイを書き進める上で、教員には次のような役割が課せられます。

- 生徒のエッセイ執筆を促し、必要なサポートを提供する
- 必要なスキルについて、指導やアドバイスを行う
- 生徒自身の力でエッセイを書き進めさせる など

課題の選択については、生徒からの相談を受けたり、話し合いを行ったりといった教員としてのサポートは必要ですが、最終的なテーマの決定やアイデアの展開については、生徒が自らの力で進めていけるよう指導を行います。

下書きの段階では、原稿に目を通し、内容についての意見を生徒に伝えることは許されますが、原稿に手を加えたり、校正を行ったりすることは認められていません。教員が原稿に目を通すのは、下書きの際の一回のみであり、その後は最終原稿の提出時となります。特定の段落についてコメントしたり、生徒に質問をしたりすることは可能ですが、一般的には、教員はエッセイ全体に対して意見を述べる程度にとどめることが多くなります。

なお、生徒が、第二外国語、第三外国語でエッセイを書くことを選択した場合には、教員には、柔軟な対応が求められます。例えば、特定の文章や単語の使い方について、読者が理解しにくい部分などを示すことも必要です。しかしながら、エッセイの内容改善や、間違い箇所の修正作業などは、基本的に生徒自身の責任として、自らの力で行うべきことであると考えられています。

⑥ エッセイの信頼性

生徒は、自らの力でエッセイを書き進めることが求められます。万が一、疑われる部分があった場合には、提出されたエッセイについて生徒と話し合い、以下のような項目についてエッセイの信頼性を精査していきます。

- エッセイ執筆の初期段階に書いた提案やアウトライン
- 一回目の下書き
- 参照と参考文献リストが適切かどうか
- 文章の書き方・文体に矛盾がないかどうか

生徒は、最終原稿の提出時に、提出したエッセイは自らの力で書いたものであることを誓う意味で、宣誓書にサインをする必要があります。教員はそのことを事前に生徒に伝えておく必要があります。宣誓書の真偽についても検証が行われるということを、生徒に十分理解させておく必要があります。

(4) プレゼンテーション

① 概要

授業の中で、個人または小グループ（5名以内）でのプレゼンテーションを、1回以上行います。プレゼンテーションを二回以上行った場合は、その中で一番良いプレゼンテーションを教員が選び、評価の対象とします。

TOK プレゼンテーションでは、生徒が実際の生活や身の回りの環境において、特に関心のある事柄を **Knowledge Issue** として示し、それについての探究を進めていきます。担当教員の支援の下、生徒は、自分のプレゼンテーションのテーマとなる状況を、海外や国内の広い範囲から、身近な学校や地域コミュニティーなどの狭い範囲まで、自由に考え、選択します。その際、他の人にあまり知られていない、なじみのない状況を取り上げることは避けるべきです。また、取り上げるテーマの範囲が広すぎると、最も重要な **Knowledge Issue** についての説明や情報が、プレゼンテーションを聞く人々に明確に伝わらず、プレゼンテーションを計画通りに進めることができなくなることも考えられます。

エッセイをただ読み上げるだけでは、プレゼンテーションとしては認められず、資料や小道具も活用しながら、様々な手法を用いることが求められます。

<プレゼンテーションの手法の例>

- レクチャー
- スキット（寸劇）
- シミュレーション
- ゲーム
- 朗読
- インタビュー・ディベート

<活用する資料や小道具の例>

- ビデオ
- パワーポイント
- OHP
- ポスター
- アンケート調査
- インタビューや歌を録音したもの
- 衣装、小道具

プレゼンテーションには、以下のような2つのステージがあります。

- イントロダクションでは、プレゼンテーションのテーマとなる状況を、1つ又はいくつかの **Knowledge issue** と関連付けて簡単に説明する。
- 詳しい説明や自分なりの考え方を示すなど、プレゼンテーションにおいて様々な形で **Knowledge Issue** を取り上げる。選択した状況と **Knowledge Issue** との関わりについて示す。

プレゼンテーションには、なぜそのテーマが重要であるか、他の分野とどのような関連があるのかということについて、自分なりの考えや自分の経験に関することも含め、しっかりと示されていることが求められます。プレゼンテーションの時間は、一人当たりおおよそ10分間、グループで行う場合は30分間が認められます。教員は、プレゼンテーション終了後、所定の時間内に、クラスでディスカッションを行う時間が取れるように、進行の計画を立てることが望まれます。

プレゼンテーションの中で、意見交換やグループワークなどを行うことも可能ですが、単なる意見発表に終わらないよう具体的なアイデアや指示を出すことなどが求められ、そのようなプレゼンテーションの進め方も評価の対象となることを生徒に伝えておく必要があります。プレゼンテーションを行う個人又はグループは、事前にプレゼンテーション計画書を教員へ提出します。

② 教員の役割

プレゼンテーションの実施にあたって、教員は、生徒のテーマ選択の手助けや、時にはアイデアの提供も行います。また、知識に関連する生徒の考えを引き出し、根拠の示し方、課題の提起、視点、他の分野とのつながりについて共に考え、サポートを行うのが一般的な指導方法です。プレゼンテーションのテーマとして生徒が取り組むのに適した **Knowledge Issue** は、現代社会における問題や実生活の中で数多く見受けられます。生徒がこれらの問題に集中して取り組み、しっかりとしたプレゼンテーションの計画を立てられるよう教員が手助けをしていきます。

同じクラスの中で、同じテーマでプレゼンテーションをすることは認められません。TOKのねらいと学習目標に近づけるように、生徒に対してプレゼンテーションの準備に関するあらゆる機会を与え、全体的な支援を提供します。よりよい方向へと生徒を導くためのサポートを行うことは大切ですが、生徒の学習そのものを代わりに行うことは認められません。資料の収集など、生徒が余裕を持ってしっかりと準備ができるよう、プレゼンテーションの日程は、前もって生徒に伝えておく必要があります。

③ 内部評価の書類

[プレゼンテーション計画書]

生徒は、プレゼンテーション計画書を作成し、事前に提出します。

グループプレゼンテーションの場合には、一人ずつ個人でプレゼンテーション計画書を作成しても、又はグループで一つのプレゼンテーション計画書を作成しても、いずれの方法を選択しても構いません。テーマに対する考え、プレゼンテーションで取

り上げる **Knowledge Issue**、プレゼンテーションの意図など、全体のアウトラインをプレゼンテーション計画書にまとめます。

プレゼンテーション計画書は、A4用紙1枚に収まるものとし、プレゼンテーション評価規準の要件を満たし、**TOK** のねらいと学習目標についての理解を明確に示します。プレゼンテーションの概略はエッセイ形式ではなく、箇条書きなどの形で記入することが望まれます。

プレゼンテーション計画書には、以下の内容が含まれるように指導します。

- プレゼンテーションの核となる **Knowledge issue** について記す。
- プレゼンテーションの中で、**Knowledge Issue** をどのように取り入れるかについて、箇条書きなどでノート形式にまとめる。

[プレゼンテーション評価表]

教員及び生徒は、プレゼンテーション評価表を記入します。生徒は、自身のプレゼンテーションに対して自己評価を行い、自らが考える達成度と、その評価に至った理由を記入します。教員は、生徒の自己評価が妥当なものであると認められれば、その評価をそのまま採用します。プレゼンテーションの成果を教員と生徒の双方で確認し、共通の認識を持つことが重要です。

グループプレゼンテーションの場合でも、評価は個人ごとに行うべきですが、プレゼンテーションに対する貢献度が全員同等であった場合には、同様の評価が与えられます。グループプレゼンテーションでは、必ずしも全員が同じ時間、同じ分量を担当させなくてはならないということはありませんが、準備活動に全員が同じレベルで参加し、貢献していることが求められます。

<プレゼンテーション評価表の内容>

●生徒の評価

生徒は、後述する4つの評価規準（5（2）参照）における達成度を想定し、なぜその達成度になるか、評価の理由や根拠を記入します。

●教員の評価

4つの評価規準における達成度について、各評価の理由を簡単に記入します。プレゼンテーションの成果を教員と生徒の双方で確認し、共通の認識を持ちます。

④ プレゼンテーションテーマの例

プレゼンテーションのテーマは、私たちの生活や実社会と密接に関連した現代的課題を具体的に示し、**Knowledge Issue** との関わりを様々な視点から捉えることを念頭において、選択することが重要となります。プレゼンテーションに適したテーマとはどのようなものか、また、評価規準に沿ったアプローチの方法について、下記の例を参考にプレゼンテーションのテーマを生徒に考えさせることが必要です。

i) 地球温暖化

=**Knowledge issue**=

- ・実際に、地球温暖化が起こっているということは、どのようにして分かるのだろう

うか。

- ・地球温暖化が起きつつあるのかどうかを考える上で、言葉（もしくは統計、グラフ、写真）はどのように影響するだろうか。

＝構成＝

「私たちの地球は、地球温暖化に苦しんでいる」という考えに対し、専門家、政治家、活動家の賛否両論、様々な意見を取り上げた新聞の切り抜きや映像に対して、自分なりに分析や批判的評価を行う。グループプレゼンテーションの場合、各メンバーは、それぞれに異なる統計、グラフ、写真、引用などを用いてそれぞれの視点から問題に取り組む。

＝学習者の視点＝

地球が温暖化していることを認める考えは、今や主流であると言えるが、活動家や政治家については、それぞれが属する組織の利害が関係してくるので、それらと切り離して純粋に肯定や否定の意見を述べることは難しいのではないか。

ii) 集約的農業

＝Knowledge issue＝

集約的農業が常に有害であるかどうかを、私たちはどのように知るのか。

＝構成＝

世界の様々な地域で農業を営む人々の見解を調査する。発表者と聞き手で意見交換をし、課題を追求していく。

＝学習者の視点＝

世界に焦点を合わせてしまうと、問題が複雑になり過ぎてしまうが、「私たちの周辺環境においては、何が正しいか」ということに焦点を置いて進めると、より分かりやすいのではないか。

iii) メディアで紹介される「科学的な証明」に対する信頼性について

＝Knowledge issue＝

責任あるジャーナリズムの姿とは。科学的に導き出された結論の正当性を、私たちはどのようにして知ることができるか。

＝構成＝

「脂肪を全く摂取しないダイエットは、多少の脂肪を摂取するダイエットに比べ、結果が良くない」とする科学的な証明に関する新聞記事などをまとめ、分析する。新聞記事の信憑性や科学研究に基づいた資料についてディスカッションを行う。（議論の信頼性を高めるためには、どのような情報が必要だろうか。科学的な研究に基づいた資料が、結論の正しさを証明しているということを、どのようにして伝えるか。）

＝学習者の視点＝

新聞によっては、真実よりもエンターテインメント性を、より重視しているものもあるのは明らかである。それならば、更に奥深い内容の記事があった場合、どれだけの信頼性が含まれているかをどのように見分けるのか、また、それは簡単に分かる

ものなのだろうか。

iv) 何を持って芸術作品とみなすか

＝Knowledge issue＝

「まるでゴミ袋にも見える芸術作品」と、「本物のゴミ袋」とをどのように区別するか。どんなものでも芸術となり得るのか。そうだとしたら、何をもって芸術作品となるのだろうか。

＝構成＝

ゴミを詰めたビニール袋を使用した芸術作品を展示していたところ、本物のゴミと間違われて収集業者に回収されてしまったという出来事を題材に、テレビ番組のトークショーをまねた寸劇を行う。番組の司会や、問題の作品を手がけたアーティスト、芸術評論家、画廊のオーナー、現代美術に異論を投げかける出演者などを生徒が演じ、何をもって芸術作品と考えるのかについて討論を進めていく。

＝学習者の視点＝

人はなぜ十分に理解しないままに科学的な意見を無条件に受け入れ、奇抜で自分の常識からは外れているからと言って、現代美術を排除しようとするのだろうか。

v) 恐竜がどんな姿で、どんな風に動いていたのか、何をもって証明できるだろうか

＝Knowledge issue＝

古生物学で用いる調査方法は、物理や化学と同じような方法なのだろうか、それとも歴史の手法と似ているのだろうか。

＝構成＝

ある特定の恐竜の生活や生態を、まるで本物であるかのようなコメントとともに描いたテレビのドキュメンタリー番組“Walking with Dinosaurs”の一場面を見せる。

＝学習者の視点＝

面白さを出すために、テレビ番組はどの程度脚色して作られているだろうか。

5 TOKにおける具体的な評価規準

IBOでは、評価規準を設定し、それに基づく評価を基本とする方法を採用しています。

所定の課題エッセイ及びプレゼンテーションに対する評価の指標として、評価規準がそれぞれAからDまで設定されています。各評価規準では、前向きな取組に焦点を当てた達成度が記されており、十分な成果が見られなかった場合に与えられる評価は低くなります。

(1) 課題エッセイ

規準 A: Knowledge Issue に対する理解

- 所定課題に関連のある Knowledge Issue に対する理解が、エッセイの本文中で十分に表されているか。
- Knowledge Issue と「知るための方法 (Ways of knowing)」、「知識の領域 (Areas of knowledge)」との関わりを十分に認識し、エッセイの中で表現されているか。

この評価規準では、所定課題に関連のある Knowledge Issue に焦点を当ててエッセイが書かれているか、Knowledge Issue に対する理解の深さや幅の広さが本文中に表れているかどうかの評価の対象となります。「所定課題に関連のある Knowledge Issue」とは、つまり、IBによって提示された所定課題に直接関連し、エッセイ本文の中で重要な課題として扱われているものを指します。全ての所定課題が、「知るための方法 (Ways of knowing)」と「知識の領域 (Areas of knowledge)」の両方に対して、同程度の関わりを持ちながら進められるわけではないため、評価規準の詳細で表されているこれらの要素については、課題の特殊性に配慮した対応がなされる必要があります。

達成度	詳細
0	レベル1に達していない。
1-2	所定課題に関連のある Knowledge Issue に対する取組がほとんど行われておらず、エッセイの中で示される理解も限られている。「知識の領域 (Areas of knowledge)」、「知るための方法 (Ways of knowing)」については言及されていたとしても、ただ単に触れられている程度である。
3-4	所定課題に関連のある Knowledge Issue に対する取組が多少行われており、理解がいくらか示されている。「知識の領域 (Areas of knowledge)」や「知るための方法 (Ways of knowing)」との関連を示そうという試みは見受けられるが、効果的な表現はできていない。
5-6	所定課題に関連のある Knowledge Issue に対する取組が大部分で行われており、基本的な理解が示されている。「知識の領域 (Areas of knowledge)」や「知るための方法 (Ways of knowing)」との関連についてある程度効果的に示されている。
7-8	所定課題に関連のある Knowledge Issue に対する取組が一貫して行われている。「知識の領域 (Areas of knowledge)」や「知るための方法 (Ways of

	knowing) 」との関連や比較が効果的に示されており、Knowledge Issue に対する理解が深い考えに基づいて表されている。
9-10	所定課題に関連のある Knowledge Issue に対する取組が一貫して行われている。「知識の領域 (Areas of knowledge) 」や「知るための方法 (Ways of knowing) 」との関連や比較が効果的かつ緻密に示されており、Knowledge Issue に対する高度な理解が深い考えに基づいて表されている。

規準 B: 「学習者 (Knower)」の視点

- 所定課題に関連のある Knowledge Issue を、生徒自身の「学習者 (Knower)」としての経験に重ねて考えることができているか。
- 学術的・哲学的・文化的視点、性別、年齢など異なる様々な立場からの視点に、「学習者 (Knower)」としての自分自身の視点とを重ね合わせて考えを導き出し、示すことができているか。
- ありきたりな話の繰り返しや単なる数値の集計に終始するのではなく、具体例を挙げて自分なりのアプローチを示しているか。

達成度	詳細
0	レベル 1 に達していない。
1-2	所定課題に関連のある Knowledge Issue に対する自分なりの考え方が、全く示されていない。Knowledge Issue に対する個人的な試みは限られており、異なる視点及び考え方に対する探究や、情報源を明確に示そうとする努力がなされていない。また、適切な例が使われていない。
3-4	所定課題に関連のある Knowledge Issue に対する自分なりの考え方が、非常に狭い範囲である。Knowledge Issue に対する個人的な試みが多少はなされている。異なる視点や考え方に対して意識は向けているものの、それを探究しようとはしていない。また、適切な例がいくつかは使われている。
5-6	所定課題に関連のある Knowledge Issue に対する自分なりの考え方が、多少示されている。Knowledge Issue に対する個人的な試みを行なった上で、エッセイを書くことができている。異なる視点や考え方の存在を受け入れてはいるものの、それらの探究はほとんどなされていない。また、適切な例が使用できているが、多様性に乏しい。
7-8	所定課題に関連のある Knowledge Issue に対する自分なりの考え方が、十分に示されている。Knowledge Issue に対する個人的な試み、熟考がなされた上で、エッセイを書くことができおり、「学習者 (Knower)」としての自己認識が見受けられる。異なる視点や考え方に対する探究が、いくらか試みられている。また、適切な例が様々な方法で効果的に使用できている。
9-10	所定課題に関連のある Knowledge Issue に対する自分なりの考え方が、随所に示されている。Knowledge Issue に対する個人的な試み及び深い考えに基づい

	た探究がなされた上で、エッセイを書くことができおり、「学習者(Knower)」としての優れた自己認識が見受けられる。異なる視点や考え方に対する深い考察が見受けられる。また、適切な例が様々な方法で効果的に使用できている。
--	---

規準 C: Knowledge Issue の分析

- Knowledge Issue に対する探究の質はどうか。
- 伝えたいポイントがエッセイの中で正しく示されているか。議論されている内容は分かりやすく説得力のあるものとなっているか。
- 反対意見についての考察がなされているか。
- エッセイの核となる論点について、言外の意味や根拠に基づいた仮定などが示されているか。

この規準では、所定課題に関連のある Knowledge Issue についてのみ評価の対象となります。所定課題に関連のない Knowledge Issue に関する分析については、評価の対象となりません。

達成度	詳細
0	レベル1に達していない。
1-2	Knowledge Issue は示されているものの、それに対する探究は全くなされていない。エッセイのポイントについての正当性を示すための努力がほとんど行われていない。反対意見についてはほとんど触れられていない。
3-4	Knowledge Issue に対する探究が部分的に行われているものの、大部分についてはただ示されているだけである。エッセイのポイントのいくつかについては、正当性及び論点分かりやすく示されている。反対意見がそれとなく示されている。
5-6	Knowledge Issue に対する探究が行われている。ほとんどのエッセイのポイントについての正当性及び論点分かりやすく示されている。反対意見についての考察がなされている。
7-8	いくらかの洞察に基づいて、Knowledge Issue の探究が深くかつ詳細になされている。全て、若しくはほぼ全てのエッセイのポイントについての正当性及び論点分かりやすく示されている。反対意見に関する探究がなされている。エッセイの論点を持つ言外の意味について示されている。
9-10	高い洞察力に基づいて、Knowledge Issue についての探究がかなり深くかつ詳細になされている。全てのエッセイのポイントについての正当性及び論点は、分かりやすく説得力のあるものとなっている。反対意見についての探究および評価が行われている。エッセイの論点を持っている言外の意味や根拠に基づいた仮定などが示されている。

規準 D: アイデアの構成

- 全体的によくまとめられており、また、所定課題との関連も保たれているか。
- 読者の混乱を避け、意図をしっかりと伝えるために、適切な手法が選択されているか。主な用語について、読者に対して分かりやすく十分な説明がなされているか。
注意：この規準は、生徒が「母国語」レベルの言語スキルを身につけているかどうかを評価するものではない。エッセイの内容を十分に伝えることができないようなレベルでない限り、言葉遣いの間違いが多少見受けられたとしても、減点の対象となることはない。
- 事実に基づいた情報を使う場合には、その情報が正確なものであるかどうか、また、資料等が必要に応じて適切に活用されているかどうかを評価の対象となる。
- 資料を使用した場合には、読者が引用の情報を辿ることができるように、参照が必要に応じて適切に行われているか。（インターネットによる情報の場合には、アクセスした日時を記載することが必要である。）
注意：全てのエッセイに、資料や参照が必要ということではない。

1, 200から1, 600ワードの制限単語数が守られていない場合、この規準のレベル4以上の評価は得られません。また、エッセイの内容が、所定課題に関連のないものであった場合には、評価のポイントは「0」となります。

達成度	詳細
0	レベル1に達していない。
1-2	所定課題のエッセイは全体的にまとまりがなく、構成も不十分である。筆者の意図が分かりにくい。エッセイの論点をサポートするために事実に基づいた情報が使われているが、非常に不明確である。資料や情報はしっかりと認識されておらず、適切な参照を作成するための努力も見受けられない。
3-4	所定課題のエッセイは全体的にまとまりがなく、構成も不十分である。筆者の意図が伝わりにくい部分がある。使用されている用語について、説明の努力がいくらか見受けられるが、いまひとつ意味が明確ではない。エッセイの論点をサポートするために、事実に基づいた情報が使われているが、常に信頼のおける内容ではない。（いくらか不明確なものもあり、必要なはずの情報が不足したり、信頼性に欠けたりする部分がある。）資料や情報はいくらか認識されており、適切な参照を作成するための努力がいくらか見受けられるものの、資料の引用先を辿るには、情報が不完全であったり正確さに欠けたりしている。
5-6	所定課題のエッセイのまとまりは満足できるレベルであり、全体的な構成も適切である。コンセプトは適切な形で表されている。必要に応じて、コンセプトについて適切な説明がなされている。エッセイの論点をサポートするために使われている事実に基づいた情報は、ほぼ正確である。資料や

	情報についてはほとんど認識されており、参照の出来も良く、読者が資料の引用先を辿ることも可能である。しかし、正確さには多少欠けるところがある。制限単語数が守られている。
7-8	所定課題のエッセイは良くまとめられており、全体的にしっかりとした構成がなされている。コンセプトは良く考えられている。コンセプトに関する説明が、いくつか適切な場所で行われている。エッセイの論点をサポートするために使われている事実に基づいた情報は、正確である。資料や情報については認識されており、参照の出来も良く、読者が引用先を辿ることも可能である。制限単語数が守られている。
9-10	所定課題のエッセイは非常に良くまとめられており、全体的に効果の高い構成がなされている。コンセプトは良く考えられており、コンセプトに関する役立つ説明が適切な場所で行われている。エッセイの論点をサポートするために使われている事実に基づいた情報は、正確である。資料や情報については認識されており、参照の出来も良く、読者が引用源を辿ることも可能である。制限単語数が守られている。

注意点

エッセイの構成やまとめ、内容の明確さについて高い評価を得た一方で、事実関係や資料の引用先の不明確さについて低い評価となった場合、そのエッセイ全体の評価として、達成度の点数をどう付けるかは試験官の判断によります。一般的には、事実関係の確認や引用の扱いの優劣よりも、エッセイ全体の構成やまとめなどにより重点が置かれ、評価が行われます。

出典が明らかではない事実を引用したり、間違いがあったりした場合には、その程度によって対応が検討されます。エッセイ全体において、それほど大きな問題となるようなものではないと判断された場合には、特に言及されることはありません。

一方で、出典が明らかではない事実の引用や、参照の間違いがエッセイ全体の質に影響するような重大なものであった場合、総合的に考えて、エッセイ全体の構成に対する評価が低くなってしまいうこともあり得ます。反対に、エッセイの構成自体が質の低いものであった場合、参照がいかに優れていたとしても、構成力の低さを補うことはできません。

(2) プレゼンテーション

規準 A: Knowledge Issue に対する認識

- 現実の状況と Knowledge Issue との関連付けがプレゼンテーションの中で十分になされているか。

達成度	詳細
0	レベル1に達していない。

1-2	プレゼンテーションでは、Knowledge Issue について触れられてはいるものの、課題として取り上げられている現実の状況との関連付けがなされていない。
3-4	課題として取り上げられている現実の状況と Knowledge Issue との関連付けがプレゼンテーションである程度示されている。
5	課題として取り上げられている現実の状況と Knowledge Issue との関連付けがプレゼンテーションで明確に示されている。

規準 B: Knowledge Issue の扱い

- 現実の状況における Knowledge Issue に対する理解が、プレゼンテーションの中で十分に示されているか。

達成度	詳細
0	レベル 1 に達していない。
1-2	Knowledge Issue に対するいくらかの理解が、プレゼンテーションで示されている。
3-4	Knowledge Issue に対する適正な理解が、プレゼンテーションで示されている。
5	Knowledge Issue に対する優れた理解が、プレゼンテーションで示されている。

規準 C: 「学習者 (Knower)」の視点

- 実例や論拠を取り入れるにあたり、重要なポイントや自分なりのアプローチの仕方をプレゼンテーションの中で示せているか。

達成度	詳細
0	レベル 1 に達していない。
1-2	プレゼンテーションに実例や論拠などを取り入れるにあたり、自分なりの関わり方や重要なポイントを、限られた範囲でしか示せていない。
3-4	プレゼンテーションに実例や論拠などを取り入れるにあたり、自分なりの関わり方がある程度示せている。また、重要なポイントについても適切に伝えられている。
5	プレゼンテーションに実例や根拠などを取り入れるにあたり、自分なりの関わり方が明確に示せている。また、重要なポイントについても十分に伝えられている。

規準 D: Knowledge Issue とのつながり

- テーマに対する様々な視点からのアプローチの方法について、バランスのとれた見方がプレゼンテーションの中で示されていたか。
- Knowledge Issue に関する考え方を、「知るための方法 (Ways of knowing)」と「知識の領域 (Areas of knowledge)」などの様々な要素と関連付けて示しているか。

この規準で高い評価を得るためには、異なる視点の量の多さよりも、それぞれの視点においてどれだけ深く考えられたかということが、評価の対象として重視されます。

達成度	詳細
0	レベル1に達していない。
1-2	プレゼンテーションでは、少なくとも2つの異なる視点から、ある程度探究されている。
3-4	プレゼンテーションでは、ある課題に対して異なる視点からどのようなアプローチができるかについて、明確な見方が示されている。また、類似点と相違点の探究も行われている。
5	プレゼンテーションでは、ある課題に対して異なる視点からどのようなアプローチができるかについて、満足できる見方が示されている。また、関連する他の分野での場合についても考えられている。

(参考) 総括的評価と形成的評価について

総括的評価とは、単元終了時、学期末、学年末という比較的長期間にどれだけの教育成果が得られたか、どれだけ習得目標が達せられたか、その点を総括的に明らかにしようとする評価活動である。

一方、形成的評価とは、各授業や日々の課題などを通して、つまり学習指導の途中において、学習者がどの程度理解したかを評価するものである。

両者の違いについては、次の点が挙げられる。

① 目的、あるいはその機能

総括的評価の目的は、単元、1学期、1学年が終了した時点での学習結果を概観し、成績評定や単位認定などを行うことにあるが、形成的評価の目的は、教授・学習過程において学習者の習得状況を教員及び学習者にフィードバックすることである。

② 評価の時期

総括的評価は単元、学期、学年、あるいは課程の終了時などに行われるが、形成的評価活動は授業中やある単元の学習の進行中に頻繁に行われる。総括的評価が完了形の評価というならば、形成的評価は学習活動に対する進行形の評価である。

③ 評価結果の活用

総括的評価の結果は、通知表や指導要録の記入あるいは単位認定のための基礎資料として活用されることが多い。これに対し、形成的評価の結果は、教員や学習

者にフィードバックされることによって、補充学習による「つまずき回復」のために活用されたり、授業の改善のために活用されたりする。

具体的な評価活動の位相からいうならば、学年末の通知表の作成、学年末の指導要録の記入などには主に総括的評価が行われ、日常の評価活動には、主に形成的評価が行われる。

＜参考＞国際バカロレア認定校になるまでの手続き

プログラムの認定を希望する学校は、プログラムが実行可能かどうか確かめるため、IBOによる審査を受ける必要があります。手順は地域によって多少異なりますが、すべての学校に対して審査の要件は同じです。

(1) 認定の手続き

認定を受けるまでは、大まかに次のようなステップを踏みます。

①	Consideration phase (検討時期)
②	Request for candidacy (候補校の申請)
③	Candidate phase (候補校時期)

① Consideration phase (検討時期)

IBの認定の取得に関心のある学校は、IBの地域事務所（日本の場合、アジア・太平洋事務局）に登録様式（School information form）を提出します。一般的には、その後、IBの出版物のパックを購入して、国際バカロレアの理念を理解し、カリキュラム、学習内容を検討し、教員のワークショップにも参加するなど、IBプログラムの実現可能性について検討を行い、最終的にIBの認定校に申請するかを判断します。

② Request for candidacy (候補校の申請)

候補校の申請書に記入し、地域事務所に提出し、IBの申請費を送金します。その後、IBOによる候補校としての審査が行われます。

③ Candidate phase (候補校時期)

申請書を提出した学校には、認定準備の行われる間、担当のコンサルタントが決定されます。担当コンサルタントは2日間の学校訪問を実施し、学校は助言を受けることができます。

● Request for authorization

プログラム別の申請書類である Application for authorization を地域事務所に提出します。

● Verification visit (認定訪問)

Application for authorization の提出後、IBOによる各プログラムの専門家による認定訪問が行われます。

(2) 料金

IB認定校は、IBOにプログラム別の年間認定校加盟費を支払うことになっています。2つ以上のプログラムを実施している場合、割引が適用されます。

プログラム	USドル	イギリスポンド
Primary Years Programme	7,600	4,350
Middle Years Programme	8,700	4,980
Diploma Programme	10,400	5,950

(2013年8月まで)